



はまなす季刊

医療法人はまなすHP ▶▶▶ <http://www.hamanasugeka.com>

医療法人はまなす **篠路はまなすクリニック**

〒002-8024 札幌市北区篠路4条9丁目12番45号
TEL (011)776-3030・FAX (011)776-3001

医療法人はまなす **はまなす医院**

〒061-3284 石狩市花畔4条1丁目141番地1
TEL (0133)64-6622・FAX (0133)64-6555

『ウィーン学友協会』

2011年9月 工藤立史撮影

「ウィーン学友協会」は1812年設立のクラシック音楽関係者による団体及びその建物の名称です。中には黄金に輝く大ホールがあり、毎年元旦に世界中へ中継されるウィーンフィル・ニューイヤークンサートの会場になっています。現在の建物は1870年に建立されました。



巻頭言

オンライン診療

理事長 工藤 岳秋

新型コロナウイルスの蔓延に伴い、いわゆる「3密」を避ける目的でオンライン会議システムが普及しました。テレワークのみならず学校の授業や飲み会にも利用されています。

医療でも「オンライン診療」の範囲が拡大されました。これまでは慢性疾患などで容態が安定している場合の再診に限定されていたのですが、この4月に特例として初診も許可され、対象とする疾患を医師が決定できるようにまりました。政府はこの制度を恒久化する方針とのことです。

患者と医師の双方が受診に伴う感染のリスクを低減できることは確かです。他方、画面越しでは視診に限界があり、触診はできません。人間同士の信頼関係も築きにくくなります。

初診においては慎重に適用すべきです。「密接」を気にするあまり診察をおざなりにしてはなりません。少なくとも私たちが扱う消化器、外科、腎臓の病気で「リアル診療」が不可欠です。

副理事長コーナー

先日、小学3年生の息子がピアノの発表会でベートーヴェンのソナチネ第5番を演奏した。この曲は彼の作品としては比較的難易度が低く、小学生が発表会で弾くことも珍しくない。今年はベートーヴェン生誕250年ということで、他に「悲愴」、「テンペスト」、「ワルトシュタイン」といった名曲が続いた。いずれも私にとっては馴染みのある作品であり、息子のおかげで大変楽しい一時を過ごすことができた。

ベートーヴェンは1770年にドイツのボンで生まれ、22歳でウィーンへ移住、そこで世を去る1827年までの35年間を過ごしている。私は2011年にウィーンを旅行し、彼が作曲の拠点としたハイリゲンシュタット地区を訪ねたことがある。そこは、郊外の丘陵地帯にあって夏の避暑を目的とした保養地で、難聴に苦しむベートーヴェンが療養の為に移り住んだとされる。街を歩いてみると「ベートーヴェンの家」と表示された建物があちこちにある。生涯に70回以上も引っ越したためらしい。引っ越しの理由として「自分の作曲した曲を盗作されることを恐れていた」、「隣人とのトラブル」など諸説あり明らかではないが、環境の変化が作曲家に新たなインスピレーションを与え、名作誕生につながったのかもしれない。



ベートーヴェンの住居を示す地図



ベートーヴェンの胸像



ツェルニーの肖像画

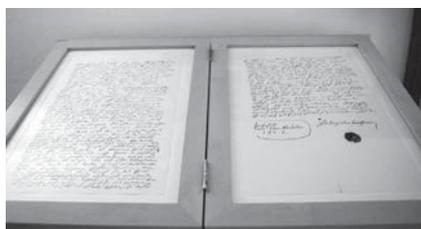
その住まいの一つが「ハイリゲンシュタット遺書の家」という記念館になっている。悪化する難聴に絶望し二人の弟宛に遺書を書いたとされる家だ。アパート二階の二部屋を利用してあり、中には遺書のコピー、胸像、亡くなった当時の住居内を描いた絵、デスマスクなどが飾られている。そこにツェルニーの肖像画が目にとまった。ピアノ練習曲集の作曲家としておなじみの人物だが、彼がベートーヴェンに弟子入りしていたことを初めて知った。簡素な施設だったが、2017年には床面積6倍に拡張され大規模なベートーヴェン・ミュージアムへ生まれ変わったと聞く。

ドイツやオーストリア以外で、日本ほどベートーヴェンが敬愛されている国はなく、年末の「第九」演奏会はいまや日本の風物詩となっている。生誕250年にちなんで盛大に記念演奏会やイベントが行われる予定だったが、コロナ禍でその多くが中止に追い込まれてしまった。今はせいぜい自宅で彼の作品に親しむ程度しかできないが、感染が落ち着いた頃

もう一度ウィーンを訪れ、リニューアルされたベートーヴェン・ミュージアムへ足を運んでみたい。



ハイリゲンシュタット遺書の家



ハイリゲンシュタットの遺書

ベートーヴェンゆかりの地を訪ねて

医療法人はまなす

副理事長

工藤立史

篠路はまなすクリニック 院内感染対策につきご指導頂きました!!

臨床工学技士 阿部 翔一

9月8日(火曜日)に北海道医療大学病院の感染管理認定看護師の村上様、感染対策チーム(ICT)所属医師の河野先生、長谷看護師長、薬剤師の岩尾先生を招き、新型コロナウイルスに重点を置いた院内感染対策につきご指導頂きました。当院の外来、待合室、透析室、病棟、放射線室の各部署を隅々まで見て頂き、感染対策マニュアルを見直しました。

問題点と改善点

- 外来の隔離部屋に換気の出来る窓が設置されていない**
→当院で窓のある個室は確保が難しい為、出入口に空気清浄機を設置し室内の換気扇も使用する。
- 待合室で患者様間の距離が適正に保たれていない**
→ソーシャルディスタンス確保の為、1席おきに座る様に座面と背もたれに表示を付ける。
- 換気中どこを換気しているのか分からない**
→「換気中」の表示を作成して換気範囲が一目でわかる様にする。
- 外来受付での感染症疑いの患者様の保険証の扱い方**
→患者様の保険証を袋などに入れて受付に提出する。
基本的に患者様の物に触れた場合手指消毒を徹底する。
- 手指消毒の設置が少ない**
→職員玄関、各外来診察室の前、汚物室の前など必要だと思われる場所を検討し設置する。
- 発熱患者様に使用する増床棟の透析室の対応**
→使用していない透析機器、ベッドにはカバーをかける。
→換気できる窓が無い為、空気清浄機を設置し室内の換気扇も使用する。
→患者様が退出したのち、寝具交換、室内にアルコール噴霧、オーバーテーブルなど患者様と自身が触れたと思われる場所を清拭し、室内の出入口を開放し換気を行う。

当院のスタッフとは違った観点で各部署チェックして頂けたので、これまで発見出来なかった盲点が明らかとなり、直ちに改善する事が出来ました。

これから冬を迎え風邪を引きやすい時期がやってきます。インフルエンザの流行と同時に、新型コロナウイルス感染症の第2波、第3波…と広がる可能性を考慮しながらより一層感染対策に尽力し、患者様に安心安全な医療を提供できる病院であり続けられる様精進して参ります。



落花生の収穫を体験して

はまなす医院 看護師 山田 尚子

9月26日、石狩落花生研究会が主催する落花生収穫作業取材してきました。場所は石狩市北生振で農業を営む須藤聖治さんの農園です。コロナ禍で自宅で過ごすことが多い中、久しぶりのドライブと野外活動にウキウキしてしまいました。出発前、雷が鳴って、ポツポツと雨が降って心配でしたが、現地に到着してみると晴れてホッとしました。広大な土地に緑の葉をつけた落花生が収穫を待っています。本誌前号で紹介した落花生の種蒔き作業から4ヶ月経ち、収穫できるまでに成長していました。研究会代表の須藤さんも「今日は雨でダメかと思ったが晴れてよかった。コロナのこともあったから『収穫会』を開催できて良かった」と笑顔を見せていました。今年の落花生の出来は、「良い」とのことで、「だんだん、石狩で落花生をつくっていることが広まってきているのがうれしい。」と話されていました。また、毎年同じ畑で作ると、病気になりやすいため、植える場所を変えているのだそうです。殻付き落花生をつまみにすると、つついとお酒が進んでしまうと話す須藤さんも「そうですね。」と意気投合。すると「落花生には二日酔いになりにくいという効果もあるようですよ。ただ、飲む量にもよりますが」など嬉しい情報も。「収穫ってうれしいですよね。」と話す「仕事となるとね。」と苦笑い。世話をして収穫を迎えるまで大変だったのだらうなと思いました。

そして、実際に収穫してみると、腰痛持ちの私や子どもでも少しの力で引き抜くことができました。ふかふかした黒土の中から乳白色の落花生が鈴なりに顔をだした時には「わーっ」と歓声が上がりました。土にまみれた落花生の匂いを感じながら、むかし祖母の家庭菜園で、草取りや水やりを手伝い、泥まみれになりながら大根や白菜、長芋などを収穫したことが懐かしく思い出されました。

秋空を見上げ、新鮮な澄んだ空気を胸いっぱい吸い込んで「うーん」と言いながら両手を上げ、高い雲を見ながら「きもちー」と声を上げてしまいました。



石狩で収穫される落花生は種皮が薄く、茹で落花生に向く品種です。さっそく、帰宅して土を洗い流しました。ゆで時間40～60分と書かれており、意外に長時間かかるのだなと思いながら丁寧にアクをとりました。我が家の子供たちは「うわ、殻が柔らかい、なんか不思議」と驚いていました。翌日はいただいたレシピに習って、炊き込み豆ご飯も作りました。

落花生の花ことばは「仲良し」です。来年もみんなで「仲良く」おいしい落花生を味わるといいなあ。

はまなす季刊 100号によせて

専務理事 工藤 春代

99号のはまなす季刊の表紙は彩り豊かなバラの庭。エントランスには、アーチと共に2種類の花のカットが配されこの上なく美しい。

工藤謙三会長が丹精こめて育てたモデルたちがポーズをとっているのだが、レイアウトの素晴らしさはいうまでもない。巻頭言に始まり開くと毎号興味深い内容が盛り込まれており、苦心されているようすがうかがい知れる。

節目の100号で、私にも原稿依頼がきた。バックナンバーを見ながら思いつくままを書いてみようと思う。

第1号

1994年3月15日、開業と同時に工藤謙三院長（現在会長）が、「はまなす開花」という題で巻頭言を書いたのが第1号であった。

表紙は開業直前、ほぼ完成したはまなす医院を正面から撮影したものであるが、折角のきれいな玄関も黒々とした春の残雪が前を阻んでいて残念。当時モノクロで今、私が手にしているのはB5判用紙にコピーされたものだが不鮮明この上ない。発行部数は30だったように記憶している。

開いた2、3ページには15人のスタッフ紹介、カットにクリニック全貌のイラストと近くの厚田海岸付近でみつけたコリンゴの写真のせている。最後の4ページは会長が同年1月1日の北海道医師会発行の機関紙に「はまなす」と題して開業直前の心境を投稿したものであった。当時は医院のはまなすのロゴマークを作成してくれたデザイン会社 アイ・エヌ・ジーさんに編集、カットをお願いした。（77号迄）



編集長誕生

開院当時は患者さんも少なく、謙三院長は多くの時間をワープロに費やすことが可能であり、職員に成り代わりゴーストライターをつとめて文章を掲載したものだだった。

そのうち、編集長には今は亡き当時の斎藤哲男事務長が、編集委員は職員が交替で選ばれて編集会議も3か月に一度開かれるようになった。就業後、現在の女子休憩室で刷り上がったばかりの季刊誌を手にし、反省と次号の計画を練った。その後お待ちかねの夕食。近くの店から生鮫を取り、私は時に漬物や豚汁等を用意して皆の労に感謝したことが思い出される。

第18号

ふとセピア色に変色した18号の表紙に目がいった。テラスでサフィニアのプランターを前に会長と当時の職員14人がにこやかにおさまっている。そのうち、5人は今も石狩、篠路で活躍している。彼らは当時、私からみれば、妹、弟、娘のような感じてあった。（現在は当前、孫世代も…）

第40号 10年のふし目

編集後記に編集長が、「最初の4年間は謙三院長が孤軍奮闘で、後半の6年は現在の編集部体制で継続してきた。数多あるこの手の機関紙でたいせつなのは、まず継続すること、次に内容を充実させること、そしてマンネリにならないこと。これらのことを念頭に置き、どこまでできたかは分からないが素人編集部で良くやってきたものだと思う」とのべている。

100号 そして未来へ

現在の編集委員もそう。医師、看護師、技士、助手さん達当医院に勤務する職員である。私の知る限りでは会長が学生時代に医学部新聞の編集に携わったという経験から、皆を指導してここまで来たものと思う。

職員も皆、容赦なく写真のモデルにされたり、原稿を依頼されることもありで多くの人の協力により季刊誌が製作されている。クリニックの歴史をここに見ることができる大切な記録誌でもある。そして現在は株式会社 大弘社印刷さんの見事なレイアウトで美しく完成。めでたし、めでたし。

皆様のご協力に多大な感謝を申し上げます。ありがとうございます。はまなすクリニックと共にはまなす季刊を末永く育て、咲かせ続けていけたらと願ってやみません。

胆振東部地震から2年 透析室の災害対策を考えてみました

臨床工学技士 高藤 一教

2018年9月6日3時7分、北海道胆振東部を最大震度7の地震が襲いました。地震そのものの大きさもさることながら、その後起きた北海道全域の停電、ブラックアウトの衝撃は大きく、道民の全てにとって今でも記憶に新しく忘れることのできない出来事だったのではないのでしょうか。

当法人でも、建物自体に被害はないものの“ブラックアウト”の影響で透析が出来ない状況となりましたが、幸いにも翌日に石狩方面の停電が復旧し、両医院150名の透析患者様を4クール行う強行で乗り越えることが出来ました。

これらの経験から2019年12月、石狩はまなす医院にガスエンジンを用いたコージェネレーションシステムを導入し、停電時に都市ガスの供給が停止しない限り、透析に必要な電力を確保できるようになっております。

今後も、いつ何時地震・台風・火災といった災害が起きないとも限らない環境の中、普段から安心・安全を心掛け万全を期していますが、これらの準備が杞憂に終わって欲しいものです。

透析患者の 皆様へ

①避難所、病院などの移動手段の確認、確保

公共交通機関は使用不能になることが予測されますので、親戚・隣人・知人・ヘルパー等、緊急時の移動手段と協力者を事前に確認し確保しておく必要があります。又、合わせて連絡先の確認をしておきましょう。

②避難先で透析をお願いすることも想定し周りの透析施設も確認しておきましょう。

③遠隔地での透析が必要になった場合は、災害対策指揮者の指示に従ってください。

④当院への連絡は電話回線が込み合うため、双方とも電話連絡せず直接来院し安否の報告をしてください。

⑤普段から用意しておくもの

◆防災袋◆

懐中電灯／乾電池／携帯電話の充電器／靴／タオル／衣類／ブランケット／雨具／軍手
マスク／ティッシュペーパー／ごみ袋／笛／水／現金／貴重品／身分証明書（コピー）

保険証／各種受給者証（コピー）

当院の住所・電話番号のメモ／自分の透析の曜日と透析時間（3時間か4時間）

内服薬の説明書（調剤から毎回もらうものを常に新しくしておく）

内服薬はすぐに持ち出せる場所に置いておく



⑥災害生活中の食事について

すぐには透析を受けられない事態が想定されるので、いつも以上に注意が必要になります。

非常食やお弁当など、蛋白・カリウム・塩分が多くなりやすいので気を付けましょう。

感染に対する抵抗力が弱いのでマスク・手洗い・うがいなどで自衛を心がけます。

いざという時にあわてないように普段から準備しておきましょう！
災害時には「あわてず」「無理せず」冷静に行動しましょう！



ちようび 掉尾を飾る — バイデン大統領の誕生と石狩市の救急医療 —

11月8日、アメリカ大統領選挙の勝者ジョー・バイデン氏のスピーチがテレビで実況中継された。副大統領候補カマラ・ハリス氏(56歳)を従えて77歳のバイデン氏が勝利宣言を行ったのである。次なる大統領の抱負を語る言葉には力があつて崇高な雰囲気漂っていた。

私は、その日、日曜日の救急医療に従事していたが、その時分運良く患者は途絶えていて、テレビにくぎ付けになった。

「戦いがすんで、赤い色(共和党)も青い色(民主党)も一つにならなければならぬ、アメリカは一つである・・・」

国民に向けられたメッセージには温かみがあり、相手を貶めるだけのトランプ氏とは異次元の感がある。選挙期間中「寝ほけバイデン」と揶揄され、ともすれば物足りないと感じられた様子は微塵もない。

掉尾を飾る、とはこのことであろう。思わず膝を打った。

掉尾とは、蛇足を承知で言えば、「つかまえられた魚が、最後の力を出して尾を振る意から転じ、物事が最後に来て盛んになること」(日本国語大辞典)とある。

死ぬ間際の魚を連想するのはサデイスティックではあるが、迫力があり言い得て妙である。

一方のトランプ氏は敗北を認めようとせず、哀れにもその姿は、掉尾を汚す、という表現がこれまたビタタリとあてはまる。

就任時、トランプ氏(70歳)は史上最高齢の大統領として華々しく政界に登場した。しかるに4年目にして職を失い、年齢の面でも記録の更新がなされてしまった。まるで人生100年時代を目の当たりにしたような政権交代劇である。

斯くいう私も1946年生まれの74歳、トランプ氏と同じ齢で、医者としてまだ現役である。それかこれか、この度、当院における新たな診療体制「日曜日の外科の救急医療」を引き受けることになった。

救急医療は地方自治体の管轄である。石狩市の場合、市に委託されて医師会がこれを受け持ってきたが、医師会に所属する開業医はそれぞれ日常の仕事が精いっぱい、休日の診療は敬遠されがちである。かつて加えて市内の開業医は減少傾向にあって医師も高齢化が進んでいる。

医師会執行部は夜間・休日の当番の割り振りにあたって長年頭を悩ませ、10年以上も前から市当局に対して「休日時間外医療センター」を作るなどの対策を迫ってきた。しかしながら当局にその気

は見られず話は平行線をたどった。

そして今年、業を煮やした医師会側が市長に向かつて休日・時間外診療を中止する旨を言い渡したのである。双方がちがいが開かぬまま2020年度の上半期をもって夜間休日の医療は打ち切られてしまった。

市長以下、保健福祉部は困り果てたことだろう。

そこに、幸慥会病院、みき内科、はまなす医院の3医療機関が、医師会の意向とは別に、率先してこの役割を担うことを申し出たのである。それぞれ思惑が異なるとはいえ、とにかくにも石狩市の時間外医療は保たれることになった。

はじめ、当院は従来通り祝祭日のみを受け持つことを申し出たのだが、その後院内で検討を重ねて年間のすべての休日をひき受けることにした。

すなわち、一年間に日曜日が52日、祝祭日が18日、つごう70日になる。

祝祭日の分はこれまでどおり北大の第一外科からの出張で賄われるので何ら問題はない。

しかるに日曜日については私がひとりで行う決意を固めた。

日曜の休みがなくなることにためらいはあったものの、二人の息子の働きによって

日常の診療に手抜きはなく、ウィークデイに勝手に仕事を休むこともできる。とは言っても高齢の身である。不都合があつて穴をあけるかもしれない。そこで抜かりなく北大第一外科の医局長にバックアップをお願いした。後顧の憂いはない。

11月はキレもよく1日が日曜日にあつてはいた。いよいよ始まりである。

— 大腿部を犬に咬みつかれた中年の女性、バスケットボールによる突き指骨折の中学生男子、大きな釣り針で人差し指を刺し貫かれた高齢の男性、プレー中に牽制球をかいくぐって右肩を脱臼した野球選手— など、多彩な患者が訪れた。

1週間後、8日の日曜日は一転して朝から暇だった。午前10時、テレビの前に陣取つてバイデン氏の登場を待ちうけ、ゆつくりとスピーチを堪能することができたという次第である。

私にとって外科の診療を行うことは容易い。百戦錬磨とまでは言わないが、これまで多くの外傷と急性腹症を手掛けてきた。これから先どんな患者が来るのか、楽しみと言えれば不謹慎になるだろうか。

40年以上もアメリカの政治に携わってきたバイデン氏が、豊富な経歴をそなえてついに大統領になった。私も医者になって50年になる。授けられた勤めに掉尾の勇をふるってのぞみたい。

お知らせ**日曜日の外科救急医療を始めました**

はまなす医院(石狩市)では、去る11月1日(日)から日曜日毎の外科救急医療を開始しました。これまでも石狩市の依頼を受けて、祝祭日の診療を行ってきましたが、今後は日曜日に加わりました。

篠路神社

篠路はまなすクリニックから徒歩5分のところに篠路神社があり、参拝に行ってきました。1855年(安政2年)に創建され札幌では最古の神社とされています。

鳥居をくぐると境内は緑に囲まれていて神聖な空気の流れていました。例年9月には例大祭が行われるのですが、今年中止になり残念です。コロナ禍で遠くに行くのをためらう中、皆さんもお近くのパワースポットを訪れてみてはいかがでしょうか。(編集委員)

**編集委員が増えました**

この度、編集委員のお手伝いをさせていただくことになりました。はまなす季刊を心待ちにされている方々のために頑張ります! よろしく願い致します。



篠路はまなすクリニック 総務
袋田 美樹

新入職員紹介

篠路はまなすクリニック 庶務
竹森 和哉さん



篠路はまなすクリニック 看護助手
金子 聡美さん



篠路はまなすクリニック 事務
辻村 真さん

編集後記

「ポインセチア、ヒイラギ、シクラメン」など街中がクリスマスモード一色になりました。生花店の店先はとても賑やかになりつい足を止めてしまいます。かつて働いたことのある生花店で夜遅くまで花束、アレンジメントづくりに精

を出して仕事をしていた頃を懐かしく思い出します。愛猫のオモチャとなった我が家のツリーは箱に入ったままです。今年はゴールドクレストに木の実など飾り付けをしてクリスマスを迎えようと思っています。(坂本維子)